HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	A・リチャードソン/J・ボウデン編「キリスト教神学事典」
Author(s)	土屋, 博
Citation	基督教学, 33, 41-45
Issue Date	1998-07-17
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46593
Type	other
File Information	33_41-45.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評

A・リチャードソン／J・ボウデン編 古屋安雄監修・佐柳文男訳『キリスト教神学事典』（教文館、一九九五年）

土屋　博

「事（辞）典」とは一般に、言葉を集めてそれに説明を付したものを言う。その言葉の選び方の基準の相違に従って、字義を中心としたものから事柄の解説を中心とするものまで、さまざまな形態に分かれる。「キリスト教神学事典」というイメージも、当然さしあたりはその枠の中におさまる。ところが他方この場合には、「神学」の特殊性のゆえに、その枠からはみ出る部分も生じてこざるをえない。つまりここでも、歴史的事実の記述を含んだ字句・概念の解説が必須の要素となるが、それだけではなく、さらに一種のメッセージが加わる。それは、項目の選定にも影響を及ぼすことになる。

およそ宗教と呼ばれるものは、人間の具体的現実の中で生きて働くときにはじめて宗教である。それゆえ「死せる教団」はありえても、「死せる宗教」という表現は形容矛盾であろう。そのような具体的現実に生きる宗教の軌跡が神学の場となる。神学は宗教現象の知的側面の反映である限り、歴史的に蓄積されてきた知識に基礎をおくが、それを越えて本質的に実践的性格をもつ。その場合の実践とは、歴史的状況へのたえざる応答であり、状況の変化に対応して繰り返し自らを新たにしようとする試みである。そうであるとすれば、キリスト教神学事典は、キリスト教という宗教が、自ら文化の一環でありながら、現代文化に対してどのような姿勢で前向きにかかわっていくのかを問い続けるものでなければならない。したがって、他の事典に比べて、この種の事典はやや寿命が短く、依然として有効性を保っているかどうかが常に吟味されるのである。

A・リチャードソンの『キリスト教神学辞典』（*A Dictionary of Christian Theology*）は一九六九年に出版

された。それはまさしく当時のキリスト教神学の姿を反映するものであり、広く受け入れられた。しかし今日のキリスト教がおかれている状況は、一九六〇年代の状況からはるかにへだたっている。そのためキリスト教神学事典も、その性格上書きかえられざるをえなくなり、J・ボウデンの手によって『キリスト教神学新事典』(*A New Dictionary of Christian Theology*)が編集され、一九八三年に出版された。本書はそれを翻訳し、さらに日本語の文献を付け加えたものである。

ボウデンの「原著序文」によれば、今回の改訂の背景には、「一九八〇年代に思潮が全く変化した」という時代感覚がある。したがって本書は「全く新しい著作(むしろ異なった著作)」になった。「アラン・リチャードソンはたしかに遠くを見る力をもっていたが、彼の時代と時代の問題意識とを超越することはできなかった」。しかしながら他方、「初版において彼が立てた項目のうちで、今回廃棄されたものがほとんどなく、新たに加えられたものも、彼には予見し得なかった新しい状況によるものばかりであることは、彼の判断の的確さに対する賛辞になる。具体的に言えば、旧版と新版とのおもな違いは、われわれの知識の増加および問題意識の変化に照らして、すべての領域について項目を大幅に増やしたことである」とも言われている。

世界的に見て、一九八〇年代に現代思想の分水嶺があるという判断はそれなりに正しい。日本に引き寄せて言えば、一九七〇年代の後半には、社会全体の意識が大きく変化していったように思われる。進歩・革新を唱えるための基準となる枠組が揺れ動き、宗教の世界では、従来とは異なる感覚をもった所謂「新々宗教」運動が台頭する。「救い」よりもむしろ「癒やし」が人々の関心の的となる。『キリスト教神学新事典』(=本書)が新たな有効性を獲得するには、このような状況の変化に対する広い視野からの洞察が必要である。キリスト教が現代に生きる宗教であろうとするとき、もはや自らの狭い世界に閉じこもっているわけにはいかない。諸々の宗教もしくは宗教的なものを自らとのかかわりにおいて理解するとともに、さまざまな文化現象の実態にも目を向けなければならない。そこで次に、本書においてそのような課題

がどの程度果たされているかを検討してみよう。

S・M・オグデンによる「多元論」(Pluralism)という項目は、近年の新しい問題意識をよく表している。それによれば、今日キリスト教神学にとって重要な多元論は「宗教的・文化的多元論」である。そして「宗教および文化の双方についてのこのように広範囲な多元性を考慮に入れようとすることは、キリスト教の証言の真理性を神学が主張することが、どのような場合でも多くの深刻な問題性を含むものであることを悟ることに直結する」と言われる。これは従来のキリスト教のあり方に対する根底的な問いかけであり、その実現はさほど簡単なことではない。それゆえ「キリスト教と他宗教」(Christianity and Other Religions)という項目(M・ブレイブローク)では、「キリスト者の大多数が、キリストにおいて救われた経験を、それがすべての民の救いの道でなければならないと主張することなしに、自分たちの救いとして満足することができるかどうかは分からない」と述べられ、「この問いにどういう答えが出されるかで、ますます増えつつある諸宗教の出会いが、競争の精神に彩られるか、親睦の精神によって彩られるかの違いが予見できるでろう」という表現で、今後の展開の不確定性が示唆されている。

いずれにしても、キリスト教を含めた諸宗教を単純に比較しているだけでは駄目なので、それらに共通する契機を「宗教」の名の下に模索しなければならない。N・スマートによる「宗教」(Religion)の項目には、彼自身の考え方が色濃くにじみ出ているが、K・バルトやD・ボンヘッファーも「本質的な意味で非宗教的でありうるものかどうか疑わしい」と述べているのは正しいであろう。「宗教社会学」(Sociology of Religion)(R・ギル)や「宗教心理学」(Psychology of Religion)(A・カニンガム)の項目は、全体として学説史の紹介の域を出ないが、一九六〇年代以降の状況を意識的に強調しようとする努力はうかがわれる。

先に述べたように、この事典は本質的に実践的性格をもっているので、現代の文化的・社会的状況に対応するような項目が新たに付け加えられる。まず教理自体が状況にそくして生まれかわらなければならない。「教理批

評」(Doctrinal Criticism) の項目 (G・ニューランズ) はそのような問題意識を示している。「神の理解は常に神からの賜物である。しかもそれは人間のつくった教理であって、暫定性や誤謬の可能性を持つものである」といういわば当然の認識に立てば、伝統的教理は歴史的に批判され、相対化されることになる。

さらにもう一歩実践的な方向へこれをおし進めると、「政治的神学」(Political Theology) (A・キー) が浮上する。この概念が一九六〇年代から広く用いられるようになったことは、「政治と宗教との間に古来からある衝突のひとこまではない」。「政治的神学はそのような衝突を唱導しているのでも、対決することがいわば道義的目標であると考えているのでもない。むしろ政治的神学は、宗教を歪め、人類に計り知れない苦しみをもたらしたような政治と宗教との衝突を克服するための試みである」と言われる。それは「まず何よりも、過去において、そして現在においても政治と宗教とが偽りの結び付きを持った例を深く意識する神学なのである」。したがって、「新しい集団によって彼らの極端な考え方は正当化するために利用されないように警戒しなければならない」のである。

政治的神学の具体例は、「黒人神学」(Black Theology) (J・H・コーン) や「フェミニスト神学」(Feminist Theology) (R・R・リューサー) として示される。これらの項目は近年における運動の展開過程を記述することに主眼をおいており、その成果の評価は今後に委ねられざるをえないであろう。さらに「解放の神学」(Liberation Theology) もこれらと結びついた概念である。この項目の執筆者であるA・キーが言うように、「これらの神学は一つの形の暴虐から解放されようとする民衆にあまりにも深く密着しているために、神学自身が圧政者から解放されたとしてもすぐに別の圧政者の支配に屈することになる危険を抱えている」。「しかし解放の神学それ自身は時熟して現れた思想であり、改善の余地はあっても、否定されることはない」のである。

本書は基本的にはプロテスタンティズムの立場から編集・執筆されているが、「ローマ・カトリック教会の神学」(Roman Catholic Theology) (W・カスパー) や「東方

正教会の神学」（Eastern Orthodox Theology）（S・ハラカス）にもかなりのスペースをさくことによって、視野を広げる試みがなされている。また「無名のキリスト教」（Anonymous Christianity）（T・F・リュル）、「マリア論」（Mariology）（R・R・リューサー）などの項目は、プロテスタンティズム以外の新しい神学的傾向に対する目くばりであろう。神学との関連においてであるが、いくつかの哲学的概念も項目としてとりあげられる。

編集者のJ・ボウデン自身によるいくつかの重要項目、例えば「イエス」（Jesus）、「聖書批評学」（Biblical Criticism）などは穏健な解説であるが、最先端の問題性にはあまりふれられていない。また、世俗化の先に現れた現代宗教の問題はいまだとりあげられるにいたっていないし、プロテスタント神学の実践的課題にもさらにエコロジーなどが付け加えられなければならないであろう。これらのことから、「キリスト教神学事典」が時代の流れにともなって繰り返し書きなおされるべきものであるという前述の性格が確認される。その可能性を自覚しながら読むとき、本書は尽きせぬ興味をよび起こしてくれる。

このような大冊をほとんど一人で翻訳された訳者の労に感謝したい。